

## 学会印象記「NPO 法人 日本ホスピス緩和ケア協会関東甲信越支部大会」

日本ホスピス緩和ケア協会は2004年、前身の「全国ホスピス・緩和ケア病棟連絡協議会」から名称変更する形で設立され、全国に8つの支部が活動しています。

毎年7月に年次大会が開催されるのですが、今回は2014年5月10日、日本ホスピス緩和ケア協会関東甲信越支部大会に参加してきました。土曜の午後という時間に関わらず、会場はほぼ満席で活発な議論がなされました。

総会の後、Whole Person Careの概要と演習について関東甲信越支部長でもある昭和大学高宮有介先生から講演があり、医療者の苦悩とそれに対するケアについて講演とミニワークショップを通じて学ばせていただきました。Whole Person Careとは治療と癒やしからなる新しいパラダイムであり、全ての医療分野に通じるアプローチです。ミニワークショップでは自分自身の「心のタンクの水の量」を考え、注いでくれるもの、出してしまうものを具体的に考えることで、自分自身の心の整理の仕方を学ぶことができました。1時間という短い時間でしたが、実際はもっと時間をかけて学ぶものとのことで、ゆっくり学んでみたいと思いました。

その後、認知症と緩和ケアについて、東京ふれあい医療生活協同組合 副理事長 平原佐斗司先生からのミニレクチャーの後、事例紹介、グループディスカッションが行われました。

高齢化に伴い認知症患者、がんを併存した認知症患者も増えてきています。周辺症状はときにご家族、医療者だけでなく患者自身の苦悩の原因となります。グループディスカッションでは各施設における周辺症状に対する苦悩の共有と対応について話し合われました。医療、介護の連携も重要で、介護職の方に対する緩和ケア教育が課題として出されました。

今年6月の緩和医療学会学術大会ではWhole Person Careについて、McGill大学Hatchinson教授の講演があり、認知症の緩和ケアのシンポジウムも行われる予定となっており、注目しています。

緩和医療学講座 大澤 岳史